

その日の広島

福岡市東区

西藤 勝

昭和20年8月6日、私14才広島市立某商業学校3年生、父母姉私4人家族として、市内石見屋町に住んでいた。父母は、年老いていて、墓石屋をしていた。戦争も末期に入り、食べ物も少く配給の「干し芋」等粉々にして「よもぎ」等を入れて食べるための軍隊や家庭からの石臼の注文が多くあった。私も学業はなく、2年生の二学期頃より市内の某鋳銅工場に学徒動員として働いていた。

8月5日（日曜日）であったが、工場の人達と県庁前の建物疎開に行き、6日は生徒は休みであった。私の家の右隣の病院の先の家から電車路まで建物疎開で空地になっていた（これが、被爆の時の避難場所となった）。8月6日私達は7時頃朝食を終り、私は二階に上がった（姉は国鉄に勤務中であった）。6畳の部屋の東側の窓辺の机に座り、見るとはなく道路の向かいの家々の屋根を見ながら、さきほど警戒警報のサイレンが鳴っていたなと思いながら「またB29が偵察に来たんだなあ」と、思いながら、今日も暑くなるなとぼんやりと座っていた。

間もなく警報解除のサイレンになった。次の瞬間、目前がオレンジ色のような青色のような光の玉が眼前に光って、次の瞬間暗黒に変わり、今度は息苦しくなり、私は無我夢中で手を上下、左右に振り続け、息苦しさに、このまま死ぬのかと思った。

時間にして5分ぐらいであったろうか。必至の思いで、生きようと体を動かし続けた。目の前が明るくなり、うすぼんやりと回りを見渡すと、さきほどまでの家はなく、小山のように倒壊し、私は倒れた家の上に立っていた。何事が起きたんだろうと唖然として立っていた。その私の耳に東側の倒壊家屋の方から「助けてくれ」と声が聞こえて来た。私は、「今はどうしていいかわからん」と叫んだ。その時、前の道路から「おい勝、どうしとる。お母さんは何をしとる」と父の呼び声で、道路を見ると父が立っている。便所には行って、隣との間の壁が崩れ、その隙間から出ていたそうだ。「さあわからん」。「ばか、あれは愚鈍だから、まだ、茶の間に座っとったんだろう。呼んでみい」。私は「お母さん、お母さん」と叫んだ。だが返事が返ってこない。「ばか、家の下敷きになつとるのにわかるか、何かで上から突いてみい」と言われて、私は木切れを拾い、茶の間と思われるところを上から突き進んだ。「うん、うん」と、下の方から呻き声が聞こえた。「ここだ、ここだ、生きておる」と私達は、思わず歓声を上げた。「さあ掘れ掘れ」と2人は素手で瓦、木切れ、壁土を取り除きに掛った。

裏の倉の土壁が倒れかかり、気持ちばかり急ぎ、片付かない。やっと背中部分とおぼしき着物が見えた。「さあ、出てこい」と父が言った。「うん、うん」と母が言うばかり。「早よ出んかい」父はどなる。「頭が、頭が」と母、頭の部分の瓦礫を取り除くと頭を25cmくらいの梁のような木材が押さえ込んでいる。私は木切れを拾い梁を持ち上げるようにし、父が、母の肩に手を掛け引き出そうとするが、出ない。何度か引張り、やっと頭が出たが足が抜けない。

瓦礫を取り除き、足を掩っているブリキを持ち上げて、やっと引出すことができた（その時、ブリキで、左足の股と脛を深く切ったようだ）。

「やあ助かった」とほっとして周りを見回すと、西側と北側より30cmぐらいまで燃えてきている。右側の電車路は逃げれそうだ。私達は、母を中に抱えるようにして、電車路へ走った。四つ角の所に四斗桶に水を張りバケツが置いてあった。私達は頭から水をかぶり、川土手へと走った。その時東警察署より警防団の土井さんが出てきて、「西藤さん、さあ川土手へ逃げなさい。あんた方が最後ですよ」と声を掛けてくれた。川土手の手前の空地に着くと、避難した人達が1人、2人と、ばらばらに座りこんでいる。そこには、小さな防空壕があった。私達もそこに座り、私は周りを見回したところ、知り合いの人の顔は見当たらない。私は10mくらい先に座ってる男の人を見た。上半身裸の胸は、火脹れとなり、また腕の皮膚は、破れ、垂れ下がっている。また、ある人は頬が横に切れて、口の中まで見えるようだった。しかし血も止まったようで、誰も痛がるようにもみえず。ただ燃え上がる火の海を眺めている。

私はそこに、しばらくいたが、熱気が風と共に吹きつけ体が焼けるようだ。水に入ったら良かろうと、京橋川の川の中に入った。川は満潮で、そこにも土手際の石垣に背をもたせ、10人ぐらい川の中にいる。私は対岸を見た。そこにも土手際に一列に20人ぐらいの人が川の中に見える。私は川の中に入っていたが、稲荷橋の電車の鉄橋に火が着き、火の粉が顔に向かって吹き付け、目を開けていられない。また土手上に上がり、熱くなると川に入るのをくりかえした。下火になったのは夕方であった。土手上から西の方に向って、市街地を眺めると、一望の焼野原に点々とビルの残骸が眺められ、己斐の山に真赤な夕陽が沈んで行き、近々の山口町の電停近くに1台の電車が焼けて止まっている。私達は誰ともなく動ける人は東警察署にと集まって来、20人位いただろうか。私は電車道側の歩道に座り、大人達の話聞いていた。「これは新型爆弾ですかの」等話しているが、誰もわからないようだ。暗くなり、三々五々警察署の中に、入っていった。建物は焼けてなく、窓とか入口の扉は壊れていたが、中は取り片付けてあり、私達3人はカウンター前のコンクリートの土間に横になった。

真っ黒な建物の中を1本のロウソクの灯が近づいてきた。炊き出しのむすびを1つずつ配ってきた。私達も頂いたが食欲は無かった。朝から何も食べてなかったなど初めて気付いた。眠るともなく眠っていたのであろう。目を覚まして見ると横にいた両親がいない。どこにいったのだろう。破れた窓を見ると、外は明るくなっていた。父が来た。「お母さんは、怪我をしているので、トラックが来たので、府中の小学校に送った。ここにいても仕方がない、東練兵場に行こう。あそこに行けば炊き出しのむすびが出るそうなの」と言う。父と共に警察署を後にして、我が家の焼け跡の前を通り練兵場へ向かった。我が家の焼け跡は、瓦礫の山となり、防火用水に養っていたフナまで黒焦げになっていた。父が焼け跡に入っていた。「まだ足の裏が熱い」と言ってすぐ出てきた。私は、道路に立って、焼け跡を見た。瓦やガラスがアメのように溶けて、一緒にひつつき、石だけが赤茶けて残っていた。道路だけは清掃したように綺麗に片付いているが、誰も歩いている人はいない。

私達は練兵場へ歩き出した。橋本町の四ツ角まで来ると、陶器屋の焼け跡に、茶碗、土瓶が山となって残っている。私は土瓶を1つ拾い。足に水があれば掛けようと拾った（私は、裸足だった）。少し行くと焼跡の水道管の壊されたところより水の出るのを見つけ、土瓶に入れ、足が熱くなったら掛けながら歩んだ。栄橋の所に来ると、2、3人知り合いの大人達に出会った。ある男の人は腰が抜けて「ここまで来たが、動けません」と座りこんでいる。父と話しているその人の横を見ると、10才くらいの男の子が横になっている。裸で体は「すす」で黒くなり死んでいるようである。立ち止まって、父が話しているのを待っていると、近所に住んでいた女学生と出会った。「お母さん、見掛けなかった」「いや、みんかった」と答えた。彼女は学徒動員で比治山裏の「被服廠」にいて、無事であったようだ。私達は二、三言、言葉を交わして練兵場に向った。